

447 β 2glycoprotein1の凝固第X因子活性化抑制効果に対する β 2glycoprotein1dependent anticardiolipin antibodyの影響について

名古屋市大, ヤマサ 勲免疫研究室*
小笠原真弓, 片野衣江, 佐々治紀, 青木耕治,
松浦栄次*, 八神喜昭

〔目的〕抗カルジオリピン抗体(aCL)は, 子宮内胎児死亡(IUFD), 血栓症等を引き起こすといわれており, aCLが胎盤における血栓を引き起こし, IUFDの原因になると推定されているが, その詳細は不明である. 最近, このaCLの測定にcofactorである β 2glycoprotein1(β 2GPI)が必要であり, さらにこの β 2GPIは凝固抑制作用を持つと報告された. 今回, β 2GPI及び β 2GPI dependent aCLが血液凝固にいかに関与するかを知る目的で凝固第X因子に対する影響を調べた.

〔方法〕 β 2GPIの第X因子の活性化に及ぼす影響については合成基質法によって検討した. 0-1200 μ gの濃度の β 2GPIを第VII因子, 第X因子, 合成基質s-2337, Tissue thromboplastinと反応させ, 405nmにおける吸光度を調べた. また, 妊娠中期以降のIUFDの既往があり, その他の動静脈血栓症の既往のない患者の血清中の β 2GPI dependent aCLをELISA法によって測定し, 3例の β 2GPI dependent aCL陽性症例を選んだ. その3例の血中よりカルジオリピン及びモノクローナル抗 β 2GPI抗体affinity columnを用いてaCL IgGを精製し, 第X因子活性化への影響を前述の合成基質法によって調べた.

〔結果〕 β 2GPIは第X因子の活性化を濃度依存性に抑制した. また, β 2GPI dependent aCLは上記の抑制を濃度依存性にblockした.

〔結論〕aCLは β 2GPIのリン脂質依存性凝固抑制作用をblockすることで血液凝固を亢進させ, このことが血栓好発部位である胎盤における血栓を引き起こしIUFDの原因になると考えられた.

448 抗リン脂質抗体が自然陰性化した習慣流産患者の予後に関する検討

琉球大
正本 仁, 彭 世宏, 稲福 薫,
東 政弘, 金澤 浩二

〔目的〕習慣流産の原因として抗リン脂質抗体の産生が指摘され, それに対する様々な治療が試みられているが, 抗リン脂質抗体陽性の習慣流産患者の中で妊娠中または妊娠後にそれらの抗体が自然陰性化する例が存在することや, そのように抗体が陰性化した例をどのように管理するかということに関しては, 未だ十分な報告がなされていない. 今回抗リン脂質抗体が自然陰性化した習慣流産患者の妊娠予後について検討した. 〔方法〕3回以上連続する自然流産の既往を持つ抗リン脂質抗体陽性習慣流産患者で, 抗凝固療法(ヘパリン療法)を施行し分娩に至った16例中, 次回妊娠した7例を対象とした. その7例に対しヘパリン療法中, 産後1ヶ月, 次回妊娠初期にそれぞれ抗リン脂質抗体を測定し, 抗体が陰性化していた例に関しては次回妊娠を無治療で経過観察し妊娠予後を評価した. 〔成績〕①対象7例中3例がヘパリン療法中, 2例が産後1ヶ月, 2例が次回妊娠初期までに抗リン脂質抗体が自然陰性化しており, 次回妊娠中も継続して陽性を示す例は1例もなかった. ②無治療で経過観察した結果, 7例全例が最終的に生児を獲得した(生児獲得率100%). ③1例は感染のため29週で早産となったが, 残りの6例はすべて満期で分娩となり, 対象7例中IUGRは1例もなかった. 〔結論〕抗リン脂質抗体陽性習慣流産患者において, 妊娠中および妊娠後に抗体が自然陰性化する例が存在し, そのような症例は無治療でも妊娠予後が良好であることが示唆された.